

データでみる軽トラ市 (その14)

愛知大学 三遠南信地域連携研究センター長 戸田敏行
地域政策学部教授

可動都市への試み

筆者は、縮減社会への対策として、即応性の高い可動都市・可動商店街の導入を提案しており、この連載では、軽トラ市を可動商店街の先行モデルと考えて、調査データに基づいた紹介を行ってきた。今回は、可動商店街を見据えた試みとして6月5日に開催された静岡県裾野市の「軽トラマーケット」について、経緯と内容を紹介したい。裾野市は、静岡県東部に位置する人口約5万の市である。と言うよりも、トヨタ自動車の「ウーブン・シティ」が展開される都市とした方が自動車関連の皆さんには分かり易いであろう。裾野市の「軽トラマーケット」案内文書には、全国で展開する「軽トラ市」との関係に触れるとともに、「可動商店街としての可能性を検証しながら…広義でのMaaSの取り組み」として



図1 軽トラマーケット全体像

いる。図1は、「軽トラマーケット」の上空写真である。全体8店舗、軽自動車7台のスタートであるが、その展開に着目したい。

○なぜ「軽トラマーケット」か

それには、3点の理由が考えられる。

第1は、裾野市の地形に起因するが、富士山・愛鷹山・箱根山の山裾に広がる細長い地形からきている(図2)。明治22年ころには、この細長い地域に5つの村が成立し、これが終戦まで続く。現在に至っても地形上、居住地が分散しており、移動は8割が自家用車依存という。ここに高齢化が重なるために、移動の困難が大きな課題となっている。

勿論、こうした状況は全国的にみられるものである。このための都市政策は、コンパクト&ネットワークとまとめられる。つまり歩いて動けるウォークアブルなコンパクト拠点に各機能をまとめて、拠点相互は各々の特性を備えてネットワークするというものである。筆者は、勿論この考え方には賛成である。しかし問題は、人口の縮減スピードがコンパクトな都市整備の進展を上回るということである。物理的な都市の継続を前提に、縮減社会に対応するには、2つの方法しかないだろう。つまり、人が動くか、施設が動くかである。可動都市は後者のイメージが強い。しかし何でも動けばよいというものではない。長期的

な人の住み方を踏まえてコンパクト化は図りつつ、そこに即応性の高い可動都市機能を組み合わせる。この賢い利用が必要ということである。

第2の理由は、「オープン・シティ」である。これは、知らない人はいないであろう。53年間生産を続けてきたトヨタ自動車東日本東富士工場跡地に展開されるモビリティ技術等の実証都市である。

裾野市は、「オープン・シティ」に呼応する形で、「スソノ・デジタル・クリエイティブ・シティ構想」を策定している。その取り組みの方向性の中では、「誰もが移動しやすい交通環境の整備」があげられており、MaaSや超小型モビリティなどの取り組みが示されている。

2021年2月23日の「オープン・シティ」鉄入れ式での豊田社長の挨拶には、「人中心の街」、「実証実験の街」、「未完成の街」の3点があげられているが、特に注目するのは「人中心の街」ということである。「オープン・シティ」のような先端的な実験都市が、「人中心の街」を宣言することは新鮮である。一方、大規模な実験都市が母都市にどのような影響をもたらすのかは、都市を扱う者としては非常に興味深い。そこで人を中心に据えることで両者が結ばれるのではないだろうかと思う。「オープン・シティ」は純粋なモデル都市であることに意味があるだろう。同時に、



図2 山裾に広がる裾野市 (地理院地図(国土地理院)により作成)



図3 高村市長 (左) と筆者

既存都市でも現在の生活から可動都市の発想が喚起されれば、両者の関係が豊かになるように思える。

第3は、「軽トラマーケット」の直接の経緯である。市町村は基本的な地域の将来像として総合計画を持っているが、裾野市は2030年までの第5次総合計画を2020年12月に議決している。この総合計画を策定する協議会で、市民委員から「軽トラ市」が発案されており、重点的な取り組みとして「月イチ軽トラ市」が記述されている。協議会会長の三ツ石純子

わくわく FCRUM
コロナに負けない 地元のわくわくを創出したい!

軽トラマーケット

2021年 6月5日(土) 雨天中止
10:00~14:00
会場:いわなみキッチン (裾野市岩波249-1)

出店者(予定)

- 1) みしまや(酒類)
- 2) Wandle Farm(野菜)
- 3) 一心(惣菜・野菜)
- 4) 沼津市地域おこし協力隊(木製品)
- 5) おひさまカフェ(コーヒー)
- 6) ふくろうの小屋(いちごおり)
- 7) スズキ(テレワークオフィスカー車内展示)
- 8) ガラクタ市(食器・調理器具)

おねがい

- 臨時駐車場を10台程度確保しています。交通情報に従ってください。
- 検温、感染対策をさせていただいた上、ご来店ください。
- また、ご来店のみなさんには記名と検温をお願いします。
- コロナウイルス感染症の拡大状況や天候により中止する場合があります。
- 当日の開催情報は右のQRコードからご確認ください。

主催: 南富士山産業連携研究会 FCRUM(フックラム) (運営: 南富士山シティ、裾野市)
協力: 裾野市商工会、岩波商店会、スズキ株式会社

図4 軽トラマーケットのチラシ

氏にお聞きしたところ、想定する場所は裾野駅前。発想の背景は知人が掛川市に住んでおり、掛川軽トラ市をイメージしたことで

ある。その際の「軽トラ市」の魅力は、人と人のつながり、そこから生まれるワクワク感だという。掛川軽トラ市は、掛川駅前毎月開催され、第6回全国軽トラ市も開催された活発な軽トラ市である。「軽トラ市」が拡大する媒体は、やはり軽トラ市自身である。

さて、筆者が感じる3点の理由をあげてみた。お読みになって、第2の理由と第3の理由の間にギャップを感じられたかもしれない。可動都市の観点からみると、第1は可動都市の必要性、第2は可動都市の未来、第3は可動都市の心である。第2と第3の橋渡しは、「ウーバン・シティ」と「軽トラ市」が結び合わされる妙味でもある。「軽トラマーケット」会場で高村裾野市長に話を伺ったが、裾野市は大まじめにこの融合を考え始めている(図3)。

○軽トラマーケットの内容

「軽トラマーケット」の内容と雰囲気をお伝えしたい。図4は、軽トラマーケットのチ

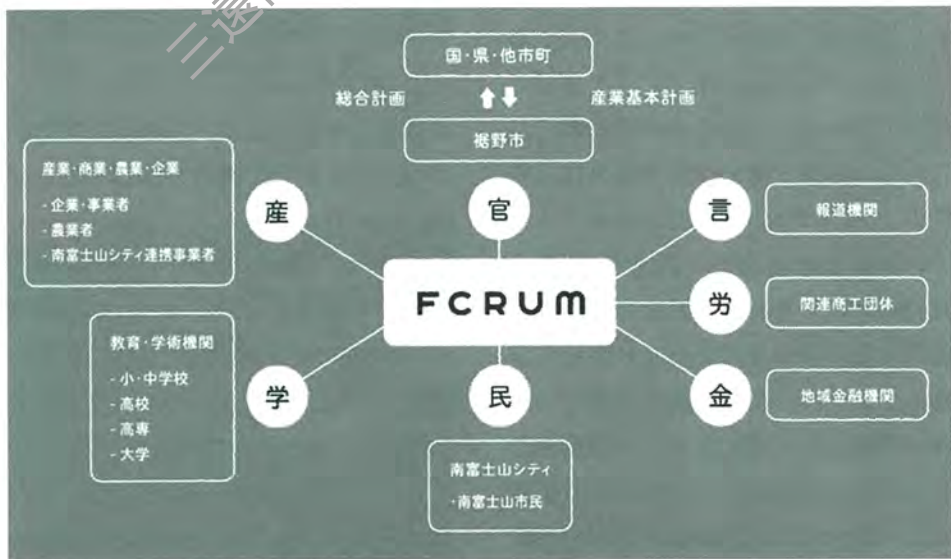


図5 南富士山産業連携研究会の概念



図6 出店車（野菜販売1）



図7 出店車（野菜販売2）



図8 出店車（スムージー）



図9 会場の風景

ラシである。午前10時から午後2時まで4時間の開催であった。運営は、産業連携の地域プラットフォームである「いわなみキッチン」を経営する一般社団法人南富士山シティが行い、スズキ株式会社が協力している。したがって、「軽トラマーケット」もこの「いわなみキッチン」を会場に開催されている。通常の「軽トラ市」と異なって、産業連携のプラットフォームとしてスタートを切っている点が興味深い。図5は、直接の主催団体である南富士山産業連携研究会FCRUM（フクラム）の概念図である。こうした産業連携が「軽トラマーケット」の中でも機能していくことを期待したい。

次に、出店車である。図6は野菜販売であり、オーストラリアからの移住者夫妻の出店

である。夫妻の移住と農家立ち上げも南富士山シティの支援によるとのことであった。図7は軽自動車メーカーからの野菜出店、図8はいちごのスムージー、なかなかの美味であった。その他に、テレワークオフィスカーが出店している。図3の写真は、車体後部での販売の様子であるが、内部は移動オフィスである。こうした車の使い方自体も来場者の興味を引くものであり、通常の「軽トラ市」にも新規アイデア車種の、出店があればと思う。

当日は、軽自動車メーカー、IT関連企業など通常の「軽トラ市」とは異なった参加者も多かったが、可動都市への試みを感じさせ、ワクワクするものであった（図9）。裾野市の取り組みに、今後とも注目したい。